切腹

kurose shojiro

黒瀬昇次郎

切腹

黒瀬昇次郎
kurose shojiro

致知出版社

黒瀬舜次郎（くろせ しょうじろう）
出生地　熊本県天草郡天草町高浜
生年月日　大正10年９月25日
学　歴　小学校修了。
職　歴　農業、丁稚、炭坑夫、職工等を転々とし、昭和17年１月現役兵入隊。病を得て昭和19年現役解除、再び職工になる。昭和20年８月敗戦と同時に小倉市より上阪、闇商人の群に入る。昭和22年末ごろより珈琲業にたずさわり、現在ミリオン珈琲貿易株式会社代表取締役会長。
著　書　「人間の本性」「中村久子先生の一生」「中村久子の生涯」（編述）（以上小社刊）「炎を洗う」「コーヒー野郎」その他若干。別にレコード作詞二、三。
現住所　〒553 大阪市福島区福島6-17-3
TEL 06-452-0341　FAX 06-452-0347
■左写真撮影　福島譲二氏

切腹

平成八年六月三十日第一刷発行
著者　黒瀬舜次郎
発行者　藤尾　秀昭
発行所　致知出版社
〒150東京都渋谷区神宮前六の十二の十八
TEL（〇三）三四〇九―五六三二
印刷　サトウ印書館　製本　難波製本
落丁・乱丁はお取替え致します。
（検印廃止）

©Shojirou Kurose 1996 Printed in Japan
ISBN 4-88474-390-3　C0095

まえがき

鈴木重成伝を書いてみようか、と思ったのは今から三十年ばかり前である。島原・天草の乱のあと、天草農民のために切腹した武士が居る、それも徳川譜代の幕臣である、と知って興味をそそられた。

筆者は天草の生まれである。私の生まれた高浜村の鎮守に八幡宮がある。この八幡宮は村の中央にそそり立って（といっても低い丘だが）樹齢数百年の松の大木にかこまれて荘厳な気を漂わせていた。その村社の横にこぢんまりとした脇宮（わきみや）としての鈴木神社があった。

幼いころこの神社を見て、一体何だろう、と感じたことがある。この神社が天草農民のために切腹して死んだ鈴木重成公のものだ、と知ったのはずっとあとのことだが、郷土史家の話を聞き、郷土史を見る機会がある毎に、「書いてみようか」という気を起こしたのだが、調べて行くうちに、この鈴木重成公は、夥（おびただ）しい寺社を天草郡中に建てている事がわかった。平成八年の時価にすれば数百億円を超すであろう。

「この資金は一体どこから出たのか」

商人である私はまずこの資金の事が気になった。しかし確たる資金の出所はつかめなかった。この事は遂にこの書を上梓するに至った今もわからない。わずかに「鈴木正三道人全集」三十九頁に「上（かみ）に奉（ウツタエタテマツリ）レ　詔（カシ）二十余箇処の精舎を建て」とあるから、幕府の御下賜金で建立されたものと

思われる。天草の乱で焼亡しつくされた天草農民に寺社建立の拠出金の余裕はなかった筈である。この幕府の寺社建立資金が農民の日々の食を得る資になり、徐々に復興の兆しを見せ、キリシタン宗徒の仏教教化が徐々に浸透していったようだ。

乱後の島原では苛酷なキリシタン狩りが行われ無残な拷問が行われたようだが、鈴木重成の天草では拷問政策はみられない。根気づよい説得と、仏教宣布のひたむきな努力が、仏教化に実を結んだのであろう。

彼の「優しさ」が仏教の持つ「優しさ」を民の心に融けこませていったようである。ここにはまた、禅浄双修（禅宗と浄土宗）の融通無礙な思想を持つ、兄、鈴木正三和尚の天草巡錫（説法めぐり）の功も多大であった。天草の乱後、比較的なおだやかさを保って、治政の功をあげ得たのは、正三と重成の兄弟愛がもたらした成果ではないか、と筆者は思っている。

重成治下の天草には天災地変がしばしば起こっているが、旱魃冷害のために餓死者が出たという記録はない。代官業に熟達していた重成の備蓄政策の功によるものと思われる。文中、餓死者が出たがごとく表現している所があるが、これは当時の情勢からみて、一人の餓死者も出なかった、ということはあり得なかったのではないか、という筆者の推測によるものである。

先に筆者は「鈴木重成伝」を書いてみようか、という気を起こした、と述べたが、書くのをためらわせていた理由に二、三がある。

一つは、「鈴木正三」という傑僧と格闘する勇気と自信がなかった事である。鈴木正三については鈴木鉄心師の編になる「鈴木正三道人全集」があるが、「葉隠」の思想と根を同じくするといわれる鈴木正三の思想、言行に対決し得るものを当時の私は持ち合わせていなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もう一つは「不干斎巴鼻庵」（一五六五―一六二一）という怪奇な人物の出現である。これは本文で詳述しているので述べないが、約三百八十年前に神道、儒教、仏教、キリスト教をことごとく論破し、若干の年代をへだてて鈴木正三と論戦をたたかわせている事である。面白い、と思ったがどう組み合わせるかが問題であった。

もう一つの理由は鈴木重成の真摯さと、信念のためには「腹を切る」勇気にある。私はたじろいだ。多分に不良性を持ち、他人以上に卑怯な私は、彼の勇気と真摯さに対決する勇気を持たなかった。

それをふっ切らせて「よし書いてやろう」という気になったのは、天草郡本渡市の錚々たる方々の言である。この人々は私を「中村久子女史」と「人間の本性」の講演に呼んで下さったが、講演後の招宴で一斉に言われた。

「人間の本性もよかです。中村久子女史もほんとによかです。ばってんが貴ッ方は天草生まれの天草者でっしょが。あんたは今日の講演で、わしゃ詰まらん事ばっかりしてきた詰まらん者です、と言われたが、そがん詰まらん事ばっかりしとるなら、ひとつ鈴木重成公ば書いて、ちっとばっかりはよか事もしなっせ。中村女史は岐阜県の人ですばい。その岐阜県の人ば書いて、天草ン人の事ば書かんのは、こら、なんちゅう事ですか。あんたももう七十三歳でっしょもん。先は長うはなかとですばい。天草ンために、天草の事ば書きなっせ。それが貴ッ方の言う功徳というもんですばい。それが詰まらん事ばっかりしてきたという貴ッ方の天草への死にみやげじゃなかとですか」

見事に一本とられて、書きます、書きます、と言わされるハメになった。一方で年も経て、正三、不干斎巴鼻庵、重成と対決できるという自信もあった。

「あんたももう先は長うなかとですばい」

とずばり言われて、ほんとだ、もう先は長くないと気づき、その場で資料蒐集の協力を頼み、やっと書ける状態の資料が整ったのはそれから半年後の、平成七年五月末である。

六月一日から書き始めて半年後の十一月十日に脱稿した。四百字詰め六百五十枚である。本来なら三年か五年かかる仕事がわずか六ヶ月で出来上がった。これは郷土天草の有志の方々の迅速な資料提供と熱意によるものである。私の「生き急ぎ」「死に急ぐ」せかされた気持ちも拍車をかけた。

「中村久子の生涯」や「人間の本性」を書きあげたときは一、二週間呆然としていた。今この稿を書きあげて、何らの感興もわいてこない。感激もない。

感興と感激がわき上がるのは、この本が製本されて、手にしたときにあるように思われる。

平成八年四月二十日

黒瀬昇次郎

目次

まえがき　1

「島原・天草の乱」始末　11

凪　22

天草亡所　32

キリストを踏む　38

鈴木正三　47

恩真寺　55

対　面　68

二十五菩薩　77

不干斎ハビアン　86

天草へ　98

天草仕置始め　102

酒と饅頭　110
天徳院梅雪　118
紛れ道　130
力三郎と女　150
みせしめの痕　167
妙　薬　181
一合の米　一粒の銀　189
職業は仏の行いである　199
頭陀袋　205
破吉利支丹　215
円通寺　230
足　跡　236
三千三百三十三頸供養　248
医書配布　258
「職業即仏行」説法二年　263
杉　267

並太郎 273
殺生 280
世上騒然 286
ためし責め 293
無常 306
女冥利(おんなみょうり) 312
奔走 319
徒労 327
わが事畢(おわ)る 333
表(ひょう) 337
処置裁決 346
不慮のあと 358
罠(わな) 369
殉死 379
あとがき 387

カバーデザイン——川上成夫
カバーイラスト——藤居正彦
編集協力——文香社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

切腹

「島原・天草の乱」始末

島原城主松倉勝家のキリシタン弾圧は、これがこの世のものか、と思われるほどの無残さであった。

キリシタンを転ばない者は、代官所の仕置場にひき出され、みせしめのために狩り出された村人の前で、両手を後ろ手にくくられたあと、首輪のついた蓑を着せられ、火をつけられた。

火だるまになり、灼熱のあつさに耐えかねて、悲鳴をあげ、走り回り、ころがり回る親兄弟、親類の姿を見ると、人々は泣き叫んだ。気を失って倒れる者もいた。拳を握りしめ涙をしたたらせる者もいた。

役人たちは柵内を走り回っていた信者が、やがて地に倒れ、もがきがやんで、息絶えるのを見とどけると、立ち上がって冷然と言った。

「皆のもの、このようにならぬよう、キリシタン邪宗の教えにまどわされるな」

「蓑踊り」といわれるこの極刑を目にした村人は、柵から遠のくと、

「人殺しっ。そこまでせんでもよかじゃないか。今に罰があたるぞ。おどれたち、いつかきっと呪い殺してやるっ」

口々に叫ぶと、蜘蛛の子を散らすように逃げた。

苛政も目を掩うほどであった。
年貢の取立てには、いかなる事情も斟酌されなかった。
ある村では、わずかな年貢が納められず、来年への延期を願い出たが、聞き入れられなかった。役人は六つになる女の子を、さかさにして水につけた。農夫は身代わりを申し出たが聞き入れらず、逆上した彼はわが娘を出刃で刺し殺し、自分ものどをついて死んだ。
不作で割りあての五俵の米を納めることのできなかった農夫は、
「隠し持っておろう。出すまでこれを握れ」
と、真っ赤になった焼け火箸を握らされた。
「ほんとでございます。一粒の米もございません」
と言う口に、囲炉裏の熾がつっこまれた。
焼けただれた口は、ものを食うことができず、十五日目に死んだ。口のまわりには蛆がたかっていた。
キリシタンで年貢を怠った者は、雲仙嶽の沸騰する地獄の湯の上に吊り上げられ、一寸（約三センチ）ずつ、一寸ずつ足の先から沈められ、熱湯が鼻に達する前に、悲鳴をあげながら、もがき死んだ。

対岸の天草でも、唐津城主寺沢堅高は、冷酷無情な年貢取立てを行った。
天草は従来検地高三万七千四百六石二斗四升である。この天草は関ヶ原の戦いの折、徳川方に加担した戦功によって寺沢堅高の父、唐津城主広高にあたえられたものだが、子の堅高は、この

天草の石高を、強引に延縄検地して一割二分三厘をふやし、四万二千石として幕府に報告し、その新検地の石高で年貢を取り立てた。

延縄検地で生じた新たな収入は、幕府へおもねる過大な献上になった。同時に領主寺沢家の奢侈にもあてられた。

天草は海辺にすぐ山の麓が落ちこむ険阻な地形である。平地はひとすくいほどしかなく、土地はやせて、一鍬打ちこめばすぐ岩盤にあたる。

延縄検地で年貢のふえた農民は、その日、その日の食いしろに、事欠くようになった。年貢がとどこうれば、農夫はまず片足をかまどの火に押しこまれた。

その幼い子供たちは一人ずつ、むしろでまかれて立たされ、何日間も雨にさらされた。

このころから対岸の島原で行われていた、キリシタン迫害の火あぶり、穴吊し、手足の指切断や、キリシタン婦女の凌辱なども、徐々に天草で行われるようになった。

寛永十一年（一六三四）から十四年にかけて、日本全国が三年連続の凶作に見舞われ、天草の庶民は、草木の根や葉っぱで飢えをしのいだが、ついに死人が道路に数多くころがりはじめた。盗み、押入り強盗も姿をみせ、民、百姓は夜、安心してねることができなくなった。

しかし、こういう事態にも年貢の取立てはますます厳しくなっていった。

島原にも天草にも絶望の気がみなぎっていた。

天草、島原は生き地獄の土地といってよかった。人々は生きることに望みを失っていた。この

生き地獄を這い逃れて、
（この世のどんな罪でも許してくれる、というデウスのもとに行こう）
という気持を、ほとんどの人が持ったにちがいない。
パーテレ（神父）は言う。
「信ずる者は救われる」
と。
このひとことは農民の心にくいこんだ。
島原、天草の農民は、一途に救いを求めていた。領主を殺してでも、天国に行けるなら行こう、と考えた。できるなら、幕府の許しを得て、
（島原、天草にデウスの神の国を打ち樹てよう）
とも思った。
島原・天草の農民の大半が苛政をうらみ、怒りと呪いの鬱積は大きな津波のように盛り上がった。
おだやかならぬ空気が天草、島原の地にみなぎった。
寛永十四（一六三七）年の半ば、天草や島原の村々に、
（やがてデウスの救いがある。もうすぐデウスの天使が現れる）
という噂が流れ、いつかそれは人々の心に、根深くくいこんで、つよい期待が持たれるように

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com